

ベルデーは、環境保護と貧困層支援の両立を目的とした団体である。代表のアラン氏は、弁護士志望だったが、地域貢献を企図しポートランドで活動しているという。

イノベーションにより環境保護の仕事を生み出し、その仕事をラティーノやネイティブアメリカンなどの貧困層に対して提供している企業体であり、2005年から活動している。

環境保護や持続可能性などの考えは、低所得者層とビジネス界の両方に少なかったという。そこで、環境保護と低所得者対策を、同時に解決する方法を模索した。

それで、環境保護に関係して事業を立ち上げて、仕事を作り、低所得者地域に介入することにしたのであった。そして、どうすれば政府にインパクトを与えることができるか考えた。

環境保護の仕事をする低所得者が、他の人に「いい仕事である」と伝えるなど、口コミの効果も重要だった。また、アウトリーチ活動（草の根の団体などをまとめること）として、仕事のトレーニングを通じて、コミュニティをまとめるなど、取り組んできた。草の根団体だけでなく、他の貧困層団体、移民、ラティーノ、ネイティブアメリカンなどとともに活動してきた。そして、ピアパートナーとして、政府に働きかけてきた。

政府などに環境保護の話を持って行って、それが、施策として取り上げられると、低所得者層への仕事として戻ってくる。また、川の公害防止や、植林活動など、政府以外にも、企業等の団体とも協働ができるのである。

政府の環境分野での方針転換により、結果的に低所得者層が潤うのである。投資家などは古い考えを持っていたが、貧困層にも目を向けてくれるようになった。

ベルデーをはじめ、他のいろいろな団体が注目され始めたのは、予想していなかったことである。このように注目されることで、他の政府部門などにも活動がしやすくなった。

このように、他団体との協働によって、いくつかの政府方針を変えることができた。

その一つが、ポートランド市の動物管理や汚染処理などを担当する環境保全局に対して、エコルーフ（屋根の上を緑化するもの）により下水への負担を軽減させる取り組みへの補助金プログラムの申請に関し、営利と非営利のどちらからもできるようにしたことである。

そして、それまでは、環境分野の補助金を申請する場合には、環境に対する取り組みを効率的に運営できることだけを説明すればよかった。しかし、今は、その他に地域でいかに雇用を生み出すか説明することとなっている。つまり、環境分野の補助金の申請に際し、コミュニティにどれだけ利益を出すことができるか、説明する必要があるということである。

また、アシエンダという、低所得者層に住宅を提供する団体とも協働している。彼らのおかげで、サッカー場の屋根を付けることができた。

そして、1%for green という補助金を活用することで、新しくつくる公園に続く道路の整備も可能となった。

アウトリーチ活動で、また、アドボカシーを通して、単独のコミュニティではできなかった、コミュニティデザインのレベルまで手掛けることができるようになったのである。このような取り組み全体が、ベルデーの企業体がこの地区に利益をもたらすための歯車となっている。

なお、ベルデーでは、アシエンダ、ネイティブアメリカン、有色人種などのコミュニティと連携するための専門スタッフを雇っている。

そして、ポートランド内で6つの有色人種グループ、30のコミュニティを束ねている団体とも連携しており、去年、その団体から請われて、ベルデーもその団体に参加した。

ベルデーは、次の三つの変化をもたらせた。一つは、助けが必要な場合のパートナーシップである。二つ目は、ピアコミュニケーション、つまり仲間組織との連携である。そして、三つ目が、貧困対策という地区のニーズである。

これらに対して、ベルデーは環境問題のエキスパートとして各コミュニティを援助している。貧困地区にも民間企業にも、環境に関するエキスパートはいなかったため、それをベルデーが担っているのである。

カーリーパーク地区は、ポートランドの中でも公園の整備が最も欠けていた地区である。そこにある25エーカーのごみ埋め立て地跡地も、公園の整備の予定はあったが、優先順位が低く、費用がかかりすぎるといふことで、市は何もしてこなかったのである。

この25エーカーの埋め立て地の公園整備に関する権限を、市からベルデーに移譲したのである。そして、この建設予定の公園の名前を「ララス・ビル・パーク」とした。この名前は、「(地域の人に対して)公園を整備しましょう」という意味と、「(何もしない市政府に対して) 私たちに公園を整備させてくれ」という二つの意味を持っているのである。

公園整備は、この地区の人々に希望を与えるものである。この地区の住民は、自分たちではないもできない、変化することはできないと考えていたが、公園整備を通して、自分たちで何かをなしとげることができるという感覚を得て、未来への希望を見出しつつある状況となった。

公園のデザインは、地元の人たちにしてもらおう予定である。そして、この地区は、近所にスーパーマーケットもなく、新鮮な野菜を手に入れることが難しいことから、全体整備に先行して、コミュニティガーデンを整備した。

このコミュニティガーデンを作るにあたっては、地区の中学校の協力を得て、中学生によるデザインワークショップを開催した。そして、出来上がった案を教会で発表した。

建築工事にあたっては、黒人コミュニティの建築業者に依頼し、若い女性に対して建設業の職業訓練を行う団体の協力を得た。

ベルデーは、土台だけを作り、そのあとは地域の住民が頑張ったのである。公園予定地近くの住民は、もともとパッションを持っていたのだが、それを披露する場がなかったのであった。

残りの公園整備にあたっては、地域の貧困層にお金が回るようにし、ドッグパーク、サッカー場のほか、ネイティブアメリカンの集会所も整備する予定である。ネイティブアメリカンからの要望により、

彼らの儀式に使う、アメリカ原生植物も公園に植えており、毎年1エーカーずつ増やしている。

アドボカシーがポリシーを作り、投資をうんで、さらに価値を生んでいく。ベルデーは、持続可能性を、公園整備に持ち込んだのである。

地域のレベルで、環境分野の投資を集中的に行うことを、エコディストリクトと呼ぶ。日本の名古屋にも、エコディストリクト名古屋という団体があると聞いている。

ベルデーの次のステップは、公園を所有している公園局、メトロ、市など、複雑になっている関係者とのパートナーシップの構築である。必要性があれば常に変化し、一年前の自分たちと大きく違って面白いと考えている。